

# 活水女子大学における教育

—— 知と技と良き意志を磨く ——

活水女子大学 学長 加納孝代

## I 大学に複数の学部があることの意義

私は2013年4月に活水女子大学の学長に就任した。そしてすぐに、学長の役割の重要なひとつが、この大学がどのような教育を行っているかを語るということであるのに気付いた。

語りかける対象は大きく分けると三つあった。第一は在学生、第二は教職員や同窓生など。第三が外部、すなわち大学や進路を選択しようとしている高校生、その父母や家族、また高等学校の先生たちであった。「外部」にはそのほか、広い意味での一般市民や、新聞やテレビなどのいわゆるメディアも含まれる。

第一、第二の人々に向かっては、入学式や始業式など、就任直後から学内のさまざまな式典や会合で語る機会があった。活水学院の建学の理念、すなわちキリスト教の信仰に基づく女子教育は、私自身がこれまでほぼ四十年にわたって教員として仕事をしてきた間の理想や願望と同じであったので、それを長崎に来てあらためて確かめながら語る機会が与えられたことは、私にとっては嬉しいことだった。

しかし難しいと感じたのは第三の、外部の人々に向かい、活水女子大学が行っている教育について語るということであった。それをしなければならぬ機会は比較的すぐにやってきた。7月初旬に行われた、高校教員対象の入試説明会である。これは主に長崎県内の高等学校の先生方に来てもらい、活水女子大学がどのような教育を行っているかを説明し、高校の生徒たちに本学を志望することを勧めていただきたいとお願いをする集まりであった。

その説明会には本学の各学部から学部長、各学科から学科主任など、責任者が出席する予定であったし、またベテランの職員も大勢その場にいることになっていたので、私は冒頭に挨拶をするだけでよいらしかった。しかし私は、高等学校の先生方に向かって、「高等学校の女子生徒さんをぜひ活水女子大学へ送ってほしい。本学では彼女たちにとって、本当に意味のある学びを提供できるのですから」と伝えたかった。そういうことを呼びかけるからには、活水女子大学とはいったいどのような大学なのか、なぜそこに現在あるような学部や学科がならんでいるのか、そしてなぜここに来て学ぶことが女子高校生にとって有意義なのか、それを確信を持って語りたいという思いがあった。

その準備として、私は本学の歴史を記したいいくつかの印刷物のページを繰り返しながら、今日の活水女子大学が全体として行っている教育とはどういうものかを把握しようと努めた。だがそれはそれほど容易ではなかった。なぜなら、当たり前のことだが、そもそも活水女子大学は最初に現在の四つの学部からなる全体像を構想して一斉にスタートさせた大学ではなかったからである。明治12(1879)年に二人の米国人の婦人宣教師が、一人の日本人の生徒を迎える形で開学した

活水学院は、その後の百三十四年にわたる歴史のなかで少しずつその形を整えてきて、その結果として、四つの学部が並ぶ今日の姿に至ったものであった。

たとえば言えば増築・改築をしながら出来上がった家のようなものである。最初に作られたのはまず門ないし入口。その隣りにごく小規模の部屋が用意されていたのだろう。その後、比喩的表現を続けるが、座敷が加わったり、ピアノのある洋間が加わったりした。さらには台所、裁縫をする場所、美術や図工の部屋もできた。それぞれの部屋は大きくなったり、控えの間、あるいは奥の間がつけられたりしたかもしれない。図書室や雑誌室や実験室を備えるところもあったろう。その間、消えてなくなった部屋もあったかもしれない。そしてついには子供部屋や看護室までもが付け加えられて、大きな家ができたのである。

活水学院は開学当初から、女子が高度の教育を受けることの出来る学校であることを目指してきた。創立者の Elizabeth Russell (エリザベス・ラッセル) 先生は、「男子の学校が成長後男性が行わねばならないことを教える所だと言うならば、女学校も全く同様である、すなわち活水学院は女子が成長した後に女性として行わねばならないことを教えるために最善を盡す」と高らかに宣言された。同時に、当時まだ根強く残っていた封建的な身分差別や男女差別をなくすために、神の前ですべての人は等しい価値を持つとの信念に立つキリスト教信仰を、女子のための教育の基礎に据えられたのである。それはそもそも私たちの生きる目的、学ぶ目的が、社会に公平と義を満ちわたらせること、人と人の間に愛をあふれさせることであるとの宣言でもあった。

こうして活水学院はその時代時代に必要とされる知や技(わざ)、そしてその根底を支える世界観と人間観をキリスト教的理想の中から女性たちが学ぶことができるようにと、部屋部屋を用意し、そこに指導者を迎え、次の世代の指導者を育てつつ、若い人々を世に送り出していったのである。

活水の歴史についてほぼそうした理解を得た私は、7月の説明会では、現在の活水女子大学で学ぶことのできる知や技について、次のように話すことができた。

「活水女子大学には文学部と音楽学部と健康生活学部と看護学部があります。それらは人間の成長や活動に応じて必要とされる知識や能力を育てる四つの分野です。

文学部が学びの基礎に据えているのは人間の知的活動の源である言葉、言語です。その上で文学部は三つの学科に分かれ、英語学科は英語能力の習得を目標として、その過程で異文化・多文化への視野を拓けようとしています。現代日本文化学科では、自分を育んだ文化・歴史・社会環境を対象化し相対化することによって自分の立ち位置を確かめ、そこからあらためて外に向かう姿勢と視点を定めることができます。人間関係学科は自分を知り、人を知り、よりよい関係の結び方とより深い人間理解を追求してゆきます。

音楽学部は音楽という芸術の一部門における精進や訓練を通じて、人間の精神的成長と音楽のある暮らしの質的向上をめざします。キリスト教信仰を土台として建てられている活水学院にあってキリスト教音楽は、礼拝の中心にあるのみでなく、目に見えない神の働きをつねに身近に感じることで出来る人間の魂を育てるためにも、きわめて重要なものとして位置づけられています。

健康生活学部は人間ならば誰もが願う、この世における健康的で美しく、その中で楽しく成長してゆける生活を追求しています。その実現のために三つの学科を設けています。食生活健康学科では暮らしの中の「食」部分を健康的なものにするために、管理栄養士という専門職を育てています。生活デザイン学科では人間生活の「衣・住」部分を、デザインを通して文化的・芸術的に高めてゆくための学びをしています。子ども学科では次世代の主役となる乳幼児・児童・生徒を幸せに育成する教育力をもった保育士や幼稚園教諭や養護教諭を養成しています。

看護学部は、ますます高度化・先端化しつつある医療の分野にあって、人が人をケアするという愛の心をもって、病める人や高齢者を世話し、いたわり、癒し、見守る力をもつ、専門性の高い看護師や保健師の養成を目指しています」と。

## II 大学における知と技の追求

活水女子大学にある現在の学部で可能と思われる教育をおよそ前節のようにまとめながら、私は、人間が生きてゆくうえで必要とされる基礎的な力、すなわちさまざまな知や技（わざ）は、本学が備えている四つの学部、八つの学科のうちのどこかに入り、真剣な学びをすることによって、ほぼバランスよく身につけることができるということをあらためて意識した。あらゆる人にとって望ましいのは人間らしく、健康的で、楽しさも喜びもある日常の暮らしである。暮らしの舞台は家、そして家庭。人間はそこに生まれ、言葉と文字を学び、人と関係を結び、学校に通い、社会で働き、次の世代を育て、病んでは看病され、老いては介護され、看取られ、去ってゆく。そのような人間の一生に必要なとされる知と技の種類は、家を舞台ないしは場とする人間の一生の中にほとんどそのヒントがある。人はそこで命を生み、生んでもらい、育み、育んでもらい、ケアし、ケアしてもらうなど、ステージに応じて主体と客体の役割交替を繰り返しながら、あらゆる事態に対応できる知や技を身につけてゆくことが求められる。その知と技が発展してゆくべき方向も、家をフィールドとする人間の経験から見出すことができる。端的に言うならば、生かすか、殺すかと問われれば、答えは前者しかあり得ないというような最も根本的なことまで、それは私たちに教えてくれる。

社会は家をやや大きな規模に拡大したものに過ぎない。社会と家はほとんど相似形である。人が育ち、暮らす家の中やその周辺で必要とされる知や技について学び、それらを身につけた者には、社会のことはだいたいわかる。社会で働き、社会で生きてゆくことはだいたいできる。

活水学院が現在4つの学部構成で目指している女子教育はこのように、現代社会の要請に充分こたえられるものである。同時にそれは活水学院の創立者ラッセル先生が言われた、「女子が成長した後に女性として行わねばならないことを教える」というビジョンの延長上にあることもまた明らかである。ラッセル先生がそれほどの慧眼を持っておられたということをもそれは示している。

大学の外部にいる人々に向かって、活水女子大学で身につけることのできるのはどのような領域に関わる知と技であるかは、以上のような筋道で説明することができるように思う。そこで次

には教育のあり方や方法について、とくに教員が大学に学生を受け入れて教育を行う際、どのような点に配慮をしなければならないかを考えてみたい。

先に人間の一生の中ではいろいろの知や技が必要になると書いた。人間の能力は大別すれば、知的なものと技（わざ）的なものとに整理できる。そのどちらか一つだけで足りるということはない。私はここでは知を、目に見えないもの、技を、その知が目に見える形に具体化されたもの、という意味合いで使おうと思う。たとえば考える力は目に見えないから、知。それを言葉にし、語り、文章に記す力は、技だ、という使い方である。技は英語でいえばスキル、あるいはテクニック。知は英語でいえばインテリジェンス、ウィズダムなどと言えようか。知は技に具体化されてこそ役に立つものである。一方、技は知の裏打ちをもたなければ手遊び（てすさび）でしかない。

人が育ってゆくどの段階における教育でも、知と技は相携えて伸びてゆくような配慮がされるべきだと思う。むしろ大学でもそうである。大学は知だけ教えればよいというところではない。技に具体化されない知は、人と世の役には立たない。大学とは人と世の役に立つべき教育機関なのである。

大学における教育は実学か虚学か、ということがときどき話題に上るが、今言った意味ならば、当然実学でなければならない。しかしその実学とは単なるインフォメーションやナレッジの集成ではない。そのことはまた別の機会に取り上げたいと思う。

さて大学とは知と技を磨くところであるとして、次にそこに集まる人々はどのような関係を結ぶべきであろうか。大学とは相手がたとえ年若く、経験も少なく、したがって知の面でも技の面でも自分（たとえば教師、たとえば先輩）の水準に達していないことが歴然としていても、相手の主体性と人格を最大限尊重する世界であるべきだと思う。たとえ知と技ではレベルに差があっても、大学では人格は対等なのである。権威主義的ではなく、強制的ではなく、対等の人間として、互いに相手の知と技とが伸びることを願い、助け合い、喜び合うような世界が大学である。大学の外の世界もそうであってほしいと思うが、もしもそうでない場合、せめて大学だけは、そうした世界を実現するために、構成員みなが努力する場でなければならない。とりわけ活水学院のように、神の前に人間はすべて等しい価値を有するとの信仰をもって建てられた学校にあっては、なおさらである。

その大学で教師は学生に何を教えるのか。かつて学生の手が届かない「知」を教師が持っていると考えられた時代があった。その時多くの人が「知」と思ったのは、実は知識、つまりナレッジやインフォメーションであった。そういう時代には、その知識を学生に手渡すのが教育だと考える人も多くいたと思う。しかし今はそうではない。教師の持っている知識と同じ程度のものは、情報機器等によっていとも簡単に学生の手に入り得る。そうだとすると今日教師が学生に教えるべきもの、意識して学生に手渡すべきものは、むしろ「技」のほうに近いのではないだろうか。その場合の技とは、さきほど英語で理解した「スキル」や「テクニック」とは微妙に異なるが、知に到達するための手法、方法論、論理性、整合性、判断力、決断力、直感力のようなものではないだろうか。だとすれば大学は、教師が模範を示し、実例を見せて、次に学生に対して、自分でやっごらん、と促すような教育を行う場でなければならないと言えるかもしれない。たとえ

ばかつて存在した親方と徒弟の関係のなかで、…女子大学ではこの比喻はやや場違いに響くかもしれないが…、親方が弟子を育てるような、そんな世界に案外近いものなのかもしれない。

大学とは、一人の人間から一人の人間へ、経験や方法論や失敗や成功体験が丁寧に手渡しされていくところ、そのように人間対人間という形で向き合う教師と学生とで構成されるような場である。その意味でも少人数教育は必須である。技とは一人から一人へというルートでなければ伝達できないものだからである。

### Ⅲ 良き意志

いろいろと自問自答を重ねてきたあと、四十年ほど教員という形で働いてきた経験も思い起こしながら、大学で教師が学生に伝えるべきものは、知識や情報ではなく、勉強の仕方であるということ、私はあらため確信しつつある。勉強の仕方とはすなわち、どこに問題があり、それを解くために、どのように調べ、どのような結果を得て、それをどう評価し、つぎにその先のどのような問題に進んでいくか、ということである。

大学で教師が学生に伝えて意味があるのは、このようなレベルでの「技」なのだと思う。しかし前節で述べたように「知」の裏打ちなしの「技」は、底が浅く、「技」として具現化されない「知」は役に立たない。優れた「技」が目に見えない場所、つまり頭の中に潜んでいる「知」の活動を促し続け、またその「知」が「技」の向上を不断に励まし続けつつ先に進んでいくようなものであってほしいと願う。

しかしそもそもなぜ私たちは、そのように先に進まなければならないのか。私たちはなぜ学び、働き続けなければならないのだろうか。そこまでの問いを学生に持たせ、その問いに対して前向きに、つまり「こういうことがあるから、私たちは学び続け、働き続けたいのです」との肯定形で学生が答えることができるようなどころまで、大学は学生を育てねばならないと私は考える。そこまでが大学の教師の責任なのではないだろうか。

なぜ学び、なぜ働くのかという問いは、私たちはなぜ生まれてきたのか、その人生に何の意味があるのかという問いと重なるものである。意味を問うということは人間のDNAに刷り込まれているのではないかというくらい、ほとんどの人に共通するものだと思う。神話も伝説も宗教も哲学も社会科学も歴史学も文学も、意味を巡って展開されてきた。

ではもしも今日活水女子大学の教師として上記の問いが投げかけられたら、私たちは何と答えようとするだろうか。私の場合は、この世界を自然環境も含めて少しでも美しいもの、この社会を少しでも正義と公平に満ちたもの、人と人との関係を少しでも愛でつつんだものにするために、学ぶ、働く、と答えてみたい気がする。それを「良き意志」を持つことである、と表現してみた。私にとってはその思いは青年期以降、キリスト教に触れ、またそれを信じた人々との交わりの中で少しずつ形成されてきた。それは他の人に強制するものではないが、「私の場合は」という形でならいつでも語りたいことである。

文化が多様であるとか、それにともなって、価値観も多様であるという言い方をよく聞く。

70億もの人間が住むこの世界ではそれは当然のことであろう。しかし、だからこそ私たちは人間に共通する価値観、世界観、人間観を探りつづけてゆくべきなのだと思う。世のためにも、人のためにも、隣り人のためにも、「良き意志」を持って。

このエッセイは、看護学部からとくに依頼をされて書き出したものである。依頼を受けた時に、活水女子大学に看護学部があることの意味を考えたいので、と学科主任からうかがった。大学教育の中で看護の専門職を育てていくことの意味を、教員も職員も学生も日々問い続けているからである。看護師とは肉體性と精神性ないしは靈性の双方をもつ存在である人間の傍らに立って、その喜ぶ姿、悩む姿、痛む姿、悲しむ姿、そして希望を持つ姿、ある高みに達したときの姿にまで接するという、普通の人間が経験し得るものよりはるかに幅の広い世界の中で働かねばならない。求められる知と技は、果ての見えないほど高い。そういう職業に就く人々の心の内では、いったい何のために働くのかとの問いはさぞ真剣なものであるだろう。

その時に、活水女子大学が指針とするキリスト教の理念はおそらく次のように答えるだろうと私は考える。「人が人を、愛を以てケアすることこそ、人間の最も尊い務めなのです。それこそイエス・キリストが弟子たちに教えた信仰の中心なのです」と。

人の魂を神へと向ける音楽学部、人の心を理解する文学部、人の暮らしを明るく楽しいものにする健康生活学部の隣に、人の心と体を愛をもって世話する看護学部があることは、活水学院にとっては、このような観点からいっそう意義深いことであると私は思っている。